

「関係的な生きづらさ」を オタクの人間関係から捉える試み

——「コミュニケーション不全症候群」の視点から——

檀 朋 美

1 はじめに

オタクはかつて、中島（1991）により、「コミュニケーション不全症候群」の典型として指摘された過去がある。この「コミュニケーション不全症候群」とは、現代社会の病理として中島（1991）が名付けて論じている症状で、特殊な精神的症状ではなく、「本当に普通」だったはずの人達にみられる「適応のための不適応」といえる症状であり、特徴としては次の三点にまとめられる。

- ① 「他の存在」への想像力の欠如
- ② 知り合いになるなど、自分の視野に入ってくる人間だけしか「人間」として認められない
- ③ さまざまな不適応の形があるが、それはすべて人間関係に対する適応過剰ないし適応不能として発現する

中島は、この症候群の核を占める人々の典型が、オタクや摂食障害（拒食症、過食症）を示す人達としている。

この言説が展開されてから二十年以上が過ぎた現在、オタクという言葉が誰を指すのかという意味も大きく変遷したが、それ以上に「コミュニケーション不全」の問題は限られた人達にだけ所在するとは言えなくなっている。

本研究は、「コミュニケーション不全症候群」の典型とされたオタクと、昨今の人間関係における問題とを結びつけることから出発し、オタクを自称する対象者にインタビューを行い分析、考察したものである。

2 「関係的な生きづらさ」とオタク

2.1 「関係的な生きづらさ」と「コミュニケーション不全症候群」

平成 25 年度国民生活基礎調査では、日常生活で悩みやストレスを抱える人は、48.1 パーセントにのぼり、その原因に「家族以外との人間関係」と「家族との人間関係」を理由に挙げた人は合計で全体の 28.8 パーセントとなり、項目としては「自分の仕事」36.7 パーセント、「収入・家

計・借金等」29.1パーセントについて高い数字を示している。

また、平成24年度労働者健康状況調査でも、現在の仕事や職業生活に関することで強い不安、悩み、ストレスとなっていると感じる事柄がある労働者の割合は60.9パーセントとなっており、強い不安、悩み、ストレスを感じる事柄の内容は「職場の人間関係の問題」が41.3パーセントと最も多くなっている。

平成20年度国民生活白書では、心の拠り所になる人や社会的つながりの存在が、幸福度を高めるということを示しており、対人関係が幸福に与える重要性を指摘している。故に、人間関係について知見を深めることは意義のあることといえるが、そもそも人間関係とは誰しもが携わる関係である。近年になって何故、このように人間関係の重要性が指摘されるようになってきたのだろうか。

土井（2013）は、社会の流動性の高まりによる人間関係の自由化と、価値観の多元化の進行を、人間関係に強い不安を覚えるようになった要因としている。つまり、かつては同じ地域の住民だから、同じ親族の一員だから、同じ会社の社員だからといったように、社会的な枠組みに同じく属することが、友人や仲間との関係を支える強力な基盤となっていた。換言すれば、私たちの人間関係は、その多くが社会的な制度に強く縛られていたわけだが、社会を近代化させていく過程で、私たちは旧来の制度や規範へのこだわりを弱め、それらに縛られない多様な価値観を持つようになったために、その後の関係を維持していく上で、制度的な基盤が果たす役割は大幅に小さくなってしまった。そのため、かつては制度的な枠組みによって人間関係が保障され安定性を期待できていたために、個人によって人間関係の幅にあまり差異がなかったわけだが、付き合いが自由になっていったため、その枠組みが安定した関係を保証してくれなくなり、その結果、対人関係を器用にこなせる人物と、そういった社交術に疎くて不得手な人物との間に大きな格差が生まれてくるようになった。そして人びとの間に生じたその格差は、人間としての価値を測る物差しとして作動しはじめてしまい、不安の要因となってしまったのである。（土井 2013）

また、そのような社会状況を招いた、近代化にともなって進行してきた価値観の多元化により、現在の日本では、かつてより多様な生き方が積極的に認められるようになり、人生の選択肢も広がってきた。しかし、それは同時にかつてのように安定した人生の羅針盤が見つかりにくくなったことも意味している。明確な評価の物差しが社会に存在していた時代はそれを標準器として利用することで、自己確認の基盤を確保することが容易だった。それは時々の自分の気分に左右されることなく、つねに一定の方向を指し示す人生の羅針盤となりえたのである。このような安定した人生の羅針盤が個人の内面に存在していた時代には、人びとはそれを判断の拠り所にすることで、たとえ所属する集団の人間関係に強く縛られていたとしても、そこから受ける評価を過剰に気にしなくて済んでいた。ところが、今日のように価値観が多多元化してくると、自分がどんな選択肢を選んだとしても、それを選んだことに安定した根拠を見出せなくなってしまう。このとき、人びとは、身近な他者の評価にすがること、自らの選択の客観性を少しでも確保しようとする。自らの判断が妥当であったことの根拠を、そこに求めざるを得なくなったのである。今日

では、いつも場の空気を読んで、周囲の人たちの評価を確認しなければ、いま自分が向かっている方向は本当にこれでよいのか確認を得ることが難しくなっている。自分が進むべき方向についての迷いを解消するため、周囲の反応を絶えず探って、それを自分の物差しにせざるをえない。その結果、他者による自己承認の比重が増し、それを得られるかどうかが不安の源泉となってしまったのだ。(土井 2013)

このようなことを背景に人間関係の重要性が指摘されるようになったのは間違いないだろう。そこで、土井(2013)は、人間関係の幅広さで人間の序列が決まるかのような感覚が広がっていることや自己承認欲求が肥大化し、他者による自己承認の比重が増して他者から承認を得られない人間には価値がないかのような感覚が広まっていることを指摘している。このことは、現代の日本が、自己の存在価値を人間関係に過剰に依拠している現状を反映しており、すなわちそこから零れ落ちる人々、つまり人間関係に困難を覚える人々が「生きづらさ」抱えてしまうことを示していると言えるだろう。

この人間関係における「生きづらさ」については、萱野稔人が雨宮処凛との対談でも問題視している(雨宮・萱野 2008)。ここで論じられている人間関係における精神的な「生きづらさ」について、貴戸(2011)は「人が他者や集団につながるときにある局面で不可避に立ち現れてくる関係性の失調のようなもの」として「関係的な生きづらさ」という概念を生み出している。この「関係的な生きづらさ」は、「自己責任にも社会要因にも還元されない、個人と他者や集団との「あいだ」に生じる失調」としているが、貴戸は「関係的な生きづらさ」を抱える人に対して、その要因が本人に「社会性」がないから、あるいは「コミュニケーション能力」がないから、という「自己責任論」で捉えることに、問題を個人に還元した一方向的なものとして警鐘を鳴らしている。

例として貴戸は、男女間の意思疎通をうまくいかないときを挙げている。そういった場合、男あるいは女のどちらか一方にだけ、コミュニケーション能力がないと断じることは当然できないし、ただだからといって、男女という非対称的な差異を生み出す社会構造からのみ説明できるものでもないであろう。

以上のことを踏まえると、人間関係について知見を深めることは「関係的な生きづらさ」に焦点をあてることに繋がると考えられるが、この「関係的な生きづらさ」について考えるにあたって、かつて現代社会の病理として指摘された「コミュニケーション不全症候群」という概念を参照できるのではないかと本稿は提起する。

コミュニケーション不全症候群とは、中島(1991)が名付けて論じている症状で、特殊な精神的症状ではなく、「ほんとうに普通」だったはずの人たちにみられる「適応のための不適応」といえる症状であり、特徴としては次の三点にまとめられる。

- ① 「他の存在」への想像力の欠如
- ② 知り合いになるなど、自分の視野にはいつてくる人間だけしか「人間」として認められ

ない

- ③ さまざまな不適応の形があるが、それはすべて人間関係に対する適応過剰ないし適応不能として発現する

この症候群は、言葉がうまく出ない、または人と会話するのが下手という、いわばこれまで日本人によくみられるとされてきた対人恐怖（症）的な傾向をもつ人々をさしているわけではない。この症候群の核を占める人々の典型が、オタクや摂食障害（拒食症、過食症）を示す人達としている。中島は摂食障害を「ダイエット症候群」と名付けており、適応過剰がこれにあたり、適応不能はオタクであるとしているが、本稿ではオタクにのみ焦点を当て、詳しくは述べない¹⁾。

中島によれば、オタクを「実世界のなかに自分の居場所を見出すことのできなかったはみ出しってしまった个体群」とし、「この無限に私物化することの可能な虚構空間を得て、はじめて自分自身であることをゆるされたテリトリーを見つけだす」人達であると述べている。それは例えば「たくさんのマンガ、アニメ、ビデオの作品群のなかから、特定のいくつかの、かれらの幻想のなかに共同化されやすい要素をもった作品（中略）をまず選び出し、（中略）私物化して」いくことであるという。そんなオタクは「象徴的に「人間関係よりも大切な関係性」を人間以外のもの、物質やメディアやその創造物との間に作りあげ、その方を人間とのあいだに成立する社会よりも重視し、先行させてしまうタイプのパーソナリティを基本的に有していた」と明言している。（中島 1991）

つまり、社会の価値という共同幻想の維持に背を向け、そこからおりる代償として虚構の世界に自己を押し込め、虚構の適応を作り出そうとしているのだ。

ただ、中島は繰り返し強調しているが、そういう形でしか適応できないように作られている現代という時代こそが病んでいるのであって、病理学的状況に適応するために、病理学的精神構造を身につけていくのは、むしろ自然だとさえ言わなければならないのである。

本稿では、上記のような観点、つまり、社会の価値という共同幻想の維持に背を向け、この病理学的精神構造を身につけて自己防衛をしているオタクが、コミュニケーション不全に陥ってその典型となっているという点が、ある意味で、己の存在価値が人間関係に依存するあまり、「関係的な生きづらさ」を抱えてしまう人々と重ねることができると考える。社会の価値という共同幻想は、現代では、土井が述べていた「人間関係の幅広さで人間の序列が決まるかのような感覚」や「自己承認欲求が肥大化し、他者による自己承認の比重が増して他者から承認を得られない人間には価値がないかのような感覚」に置き換えられるだろうし、コミュニケーション不全は、「人が他者や集団につながるときにある局面で不可避に立ち現れてくる関係性の失調のようなもの」としての「関係的な生きづらさ」と置き換えてもそう不自然なことではないだろう。さらにオタクが抱える「関係的な生きづらさ」について、一方的にオタクにのみ問題が還元されている点も重要である。

そこで、本稿ではオタクについて調査をすることは、すなわち「関係的な生きづらさ」に対し

て何らかの見識を与えてくれることが期待されると考える。

2.2 オタクについて

現在、日本のオタク文化の市場規模は、矢野経済研究所の調査によると、2011年度では年間8920億円を超え、一つの文化として無視できない立ち位置にある。またこの調査で明らかになっているとおり、オタク市場は非オタクである一般層を獲得し堅調に推移している。この調査というオタク市場とは、オタクの聖地である秋葉原等で扱われることが比較的多いコンテンツ、たとえばアニメ、マンガ、フィギュア、アイドル、同人誌、ボーイズラブなどである。

そもそも、オタクという言葉は大塚（2004）によれば「1983年の『漫画ブリッコ』6月号で森氏によって現在の意味で初めて用いられたといわれている」としている。その後、多くの論者がオタクに関する言説を展開している。ただし、相田（2005）が指摘するように、「「おたく」論の変遷は、「実態としてのおたく」の変化を反映しているのではない。「おたく」に関する言説の変化は、すなわち、社会の「おたく」に対する認識の変化を映したものである」のであって、「「実態としてのおたく」の全貌は誰であろうと知るよしもない」のが、現状である。

結局のところ、田川（2009）がいうように「オタクの消費対象によって定義するか、感受性やメンタリティによって定義するか、行動や態度によって定義するかによって、さまざまな定義が可能である」が、「一度定義すれば、その定義ではカバーできない層を生んでしまうことになる」のである。

その上で、本稿はオタクを調査するに当たり、定義することは難しいものの、ある程度対象を絞らざるを得ないため、オタク分析の方向性について論じた田川（2009）の捉え方を便宜的に採用することとする。それは、「自らをオタクと規定し、自らを語り、自らの文化を語る。あるいは、オタクであることを隠し、オタクと見られないように日常生活を送る」というような、「自らをオタクと定義し、オタクアイデンティティを獲得したものである」とする。

2.3 オタクとコミュニケーション、社会性についての先行研究

では、「関係的な生きづらさ」の観点からオタクを調査する前に、先行研究について、まとめておく。

オタクという言葉が、一般化するのには、1989年の連続少女誘拐殺人事件の容疑者Mがオタク的な趣味を持っていたことに注目が集まったことに端を発する。この事件によって、オタクは凶悪な犯罪者のイメージと結びつけられ、オタク＝社会性のない人、という評価にさらされてしまい、現在もその影響は少なくはない。そのため、それに反論する形での言説や研究は多い。それらの言説の中で、オタクの特徴として彼らの行うコミュニケーションに言及している研究は存在する。

たとえば、圓田（1998）は、特定のアイドルを支持するオタク達への聞き取り調査を行い、従来あるコミュニケーション類型とは異なった、メディアを介した一方向の、自己言及的な循環を

特色とする新しいコミュニケーションをオタク的コミュニケーションと名付けている。

また、相田（2004）では、オタクがその活動においてどういったコミュニケーションをしているかと、ガレージキット、漫画、同人誌、コスプレ、なりきりチャットに焦点をあてて調査し、オタクはコミュニケーション不全とは決して言えないと結論付けている。

その後、玉川（2007）はコミックマーケットのスタッフに焦点をあて、参加者として等しくオタクでもある彼らが、同じスタッフ達との仲間意識や人間関係に依拠してスタッフを続けていることを明らかにしたし、名藤（2007）も、二次創作に関わる腐女子達が、人とのつながりを求めて直接的な交流のできるイベントに出かけている事実を明らかにした。

さらに、折原（2009）は「社会的なスキル」を測る心理測定を、オタクと非オタクとの両方に行い、そこに差異がないことを示し、またオタクと密接な業界で働いている実務者へのインタビューを通して、オタクは十分に社会の一構成員としての役割を果たせる能力があるとした。

これらの先行研究の結果だけをみれば、オタクはその人間関係において、何ら問題はないような印象を受ける。しかしながら、これらの先行研究には注意しなければならない点が存在する。

圓田、相田、玉川、名藤の研究は、いずれもオタクが自身のオタク活動において行っているコミュニケーションについての見解であるし、折原の「社会的なスキル」をオタクも持っているという結果についても、オタク市場が膨大な規模で成長を遂げている現在、その担い手の中心であるオタクが社会の構成員としての役割を果たせていないはずがないのである。

細分化された集団内でのコミュニケーションに言及したところで、①「他の存在」への想像力の欠如や、②知り合いになるなど、自分の視野にはいつてくる人間だけしか「人間」として認められないことが問題となっている、コミュニケーション不全症候群への見識、つまりは「関係的な生きづらさ」への見識は深まらないであろう。

では逆に、オタクに対して、①②について調査するにはどうすればいいのか。「他の存在」への想像力や、自分の視野にはいつてくる人間でないと人間でない、という点を考慮すると、先行研究のようなオタクのコミュニティ内コミュニケーションよりも、オタクとオタクでない間でのコミュニケーションについて調査する方が、「関係的な生きづらさ」についての見識は深まると考えられる。

そこで本稿では、オタクを自認する9人の対象者に、オタクとのコミュニケーション、合わせて、オタクでない人や集団とのコミュニケーションについてインタビュー調査を行い、その差異について分析を行っていきたい。

3 調査の概要

本節では、9人の対象者へのインタビュー調査から得られた語りの分析を行う。調査は、自身の人間関係に対してオタクがどう考えているのかの内面に対する調査のため、インタビューとして半構造化面接法を採用した。

{インタビュー対象者}

25 歳から 36 歳までの、男性 2 人、女性 7 人

{データ収集期間}

2013 年 10 月から 11 月

{データ収集方法}

対象者に調査の主旨を説明し、同意が得られた対象者に対し、5 名は互いの都合で調整した場所で対面し、残り 4 名は遠方のためマイクロソフト社が提供するインターネット電話であるスカイプの音声通話を利用して、20 分から 1 時間程度のインタビューを行った。どちらの場合も、参加者の了解を得て IC レコーダーとメモによる内容の保存を行った。

{データ分析方法}

IC レコーダーに録音したインタビューとメモの内容を読み込み、米津（2010）を参考に、質的記述的研究に基づく分析を行った。この分析方法は、多様で複雑な人間の体験への理解が深まることを目指したものであり、本稿は対象者の人間関係という人によっては繊細な事柄について研究するため、個々の体験や考えをありのまま解釈するのが妥当と考え、この方法を採用した。

まず、それぞれのインタビュー内容から重要文脈を抽出し、意味のまとまりに区切って名前をつけるコード化を行い、そこからコード間の類似性と相異性に注目して大きなまとまりをつくり、名前をつけるサブカテゴリー化、さらに大きくまとめてカテゴリー化する作業を行った。この分析方法は、すべての対象者のインタビューデータを網羅的に記述することを可能にした。また、対象者がインタビューで語った内容を、対象者が語る言葉のニュアンスを崩さないように注意深く要約するなどして率直に記述することが求められるため、コードは語りの特徴を残したものにした。

この分析方法により、対象者の経験を彼らの語った言葉を使って解釈し、記述することで対象者の経験に近づくことを目指した。

{インタビュー内容}

個々の対人関係について質問をした上で、オタクとオタクでない人との付き合い方をどうしているのかを尋ねた。それがオタクであることと関係しているかどうかを検討するために、自身がオタクであることをどう思っているのかを質問した。

4 調査の結果と考察

インタビューの内容分析の例として表 1 のみを示す。このような形で質問事項に合わせて分析を行ったが紙面の都合上、その他の掲載は割愛する。（アルファベットは対象者の個別表記）

4.1 オタクであることは多数派ではない

対象者達は、オタクやオタクでない人達との対人関係についてかなりの多様性があったが、全員が会話の中で、オタクでない人をさして「一般の人」「普通の人」とは話題がない”などといった使い方をしており、オタクが少なくとも多数派ではないと意識していることが分かった。

表 1. オタクでない人と話するのに苦痛を感じたり違和感を感じたりするか

カテゴリー	サブカテゴリー	コード(語り)
苦痛はない	「自分」の使い分けがある	・オタク相手か、オタクでない相手かによって、「自分」の使い分けがあり、それに慣れているから苦痛はない[B]
	オタクかオタクでないかは関係ない	・オタク、オタクでないは関係なく、話が合わない人には苦痛は感じるし、性格的に合うかどうか[H] ・オタクでもオタクでなくても話題の選択はするから、オタク、オタクでないに、区別はない[I]
強い苦痛がある	オタクと話すのは安心感があるが、オタクでない人はそれがなく、悩む	・オタクはプロフィールが一部分かっているから安心感があって喋りやすい、その分気を使うポイントが少なくて済むけど、オタクでない人は話をするのは探り探りで、倫理的に受け入れられない話もされそうになるし、オタクであることを隠したいし、マンガの話になった時にどこまで話したらいいかわからない。こんなことを話したら引かれるかな、と思うと悩むし、悩むことはストレスなので苦痛[C]
	オタクでない人と話を合わせられない	・女性一般が好きそうなおしゃれで可愛くて彼氏と付き合っていたいのに興味もないので、話題が廣域的に合わない。そんな話題の中から、自分が興味もてる話題を探さないといけないのは面倒。変なことと言ってはいけないプレッシャーもある。また、女の同士でよくなる陰口にあまりのつかついていけないから苦痛。オタクでない人が話す話題を知らないということを何回も繰り返すのは申し訳なく思うし、普段何に興味持っているのだろうと疑問に思われないか不安。お互いに興味の部分が合わないなら無理に話さなくてもいい、ケンカさえしなければいいだろうと思う。オタクの人は、喋りたいことが人間関係以外の他にあるので、割と平和な話し方しない[B]
多少苦痛はある	オタクである自分がマイノリティであることを突きつけられるのが苦痛	・一般的に幸せであるといわれていることと、オタクでない人が幸せだと思っていることが一致しているから羨ましい。でも自分はそうではないから、自分がマイノリティであることをつきつけられ、喋っていてしんどい。マジョリティの人はいつでも周りに自分と同じ価値観の人がいるから、それ以外の人がいるということにすぐ鈍感だから、配慮がなく、しんどい。例えば、(最近結婚して新婚である)自分は一般的な価値基準から見ても順調な人生を送っているように見えるけれど、それで楽しくて仕方ないはずと当たり前のように自分の感覚までその人達の感覚で推定されてその上に全ての会話が成り立つから、それがしんどい、それは砂上の楼閣だと思う。自分がつらいと思っていることはオタクでない人には見えにくいので孤独感を感じる。一般的にみて幸せな人生だが、(夫がいるため)一人でアニメ見る時間がなくて悩んでいるのにオタクでない人には分かってもええ、世間とのずれを感じ、そういう孤独感がある。だがそれは普通の人からすれば異常であり、自分が一般の感覚ではないのが理由と分かっている、自分がただおかしいだけなので、自分を責める気持ちに繋がる、でもどうしようもなく、孤立感が深まっていく。オタクでない人は世界に自分達だけしかいないと思っているから、その孤立感を分かってもええしんどい[A]
	話題がないので疲れる	・オタクでない人と話をするのがつまらないとかではなく、世間話もするが、特に話題にすることがないから面倒[G] ・オタクでない人と共通の話題が少ないからしんどく、疲れるので、普段オタクでない人達は何をしゃべっているのだろう、と思うが悩むほどではない[F] ・オタクでない人は話す話題がないから、何を話したらいいかわからない。日常的な、これが流行っているとか今のドラマおもしろいとか、普通の人々が喋りそうな一般的なネタを持ち合わせていないので、なるべく相手がいっぱい喋ってくれたらいいなと思っている[D]
人と話すこと自体が苦痛	とにかく話すことが嫌い	・同じオタクでも合う合わないはあるが、もともと自分から喋る方ではなく、聞き役にいききたい、相手がいっぱい喋ってくれたらいいな、と思っている。オタクかオタクでないか関係なく、とにかく喋るのが嫌[D] ・仲良くない人としやべること自体苦手[B]

※Aはこの質問に対し、語りの内容から【強い苦痛】を感じているように考えられるが、「苦痛程ではないがしんどい」と答えているため、【多少苦痛はある】にカテゴリーした

4.2 二人の対象者がオタクでない人との人間関係に「関係的な生きづらさ」を抱えている

二人のオタクが、マイノリティであるからオタクでない人と人間関係を構築するのが苦痛である、あるいは、オタクでない人と価値観が違うから難しい、と述べた。二人は共通して、オタクは周囲から気持ち悪い存在と思われていると思っており、「一般的に幸せであると言われていることと、オタクでない人が幸せだと思っていることが一致しているからうらやましい、でも自分はそうではないから喋っていてしんどい」、「マジョリティの人はいつでも周りに自分と同じ価値観の人がいるから、それ以外の人がいるということにすぐ鈍感で配慮がなく、しんどい」と語っている。このことは、この二人が、オタクであるが故にオタクでない多数派に対して自分達が理解されないという苦しみを抱えていると考えられ、貴戸（2011）の「関係的な生きづらさ」という概念を理解する枠組みに収まると考えられる。この関係の改善の責任は双方にあることになるが、これを対象者の二人が、自身がオタクであるから、と自分で自分を追い込んでいる。このことは、相互交渉の失敗を自分に帰すのみで、「対等な交渉相手」として関係性に挑めないと諦めざるをえない状況が生まれている。つまり、オタクでない側の人間からの歩み寄りの不足が

あるから、ということが無視されている。二人が抱える「関係的な生きづらさ」を解決する術として、双方で「関係をつくり変えて参加可能なものにする」という方法も存在するはずである。

4.3 オタクと、オタクでない人に対してそれぞれ切り替える「スイッチ」の存在

他の対象者の中には、オタクでない人と話すのに強い苦痛があると思いながらも、オタクでない人とオタクの人と話すことの違いについては、人と付き合うこと自体が楽しいと答え、どちらも楽しいと感じている対象者もいた。彼女は、オタクの友人、あるいはオタクでない友人との対人対応の違いについて、“(「自分」を使い分けるような) スwitchの切り替えがあり、オタクでない相手にはオタクでない方のスイッチが入る”、と語っている。このスイッチについては、別の対象者からも似たような回答が得られた。この二人の対象者は、接する相手によってどのように対人関係を築いていくかその方法における自分や自己の使い分けを自覚して行っていることが分かった。

4.4 オタクと、オタクでない人に対する人間関係において流動性を身に着けている

他の五人においては、オタクとオタクでない人に対する人間関係において、話題を選ぶ、あるいは、話題を選ぶのはオタクでもオタクでなくてもすることだから特に区別はないと回答しており、強い自覚はないものの、話題を通してオタクと、オタクでない者に対する対人関係における対応を自然に変えていることが窺えた。

このことは、オタクである自身が、オタクでない人達との関係において、自らをオタクでない人達に合わせて流動させていると捉えることができる。これは先に述べた、土井 (2013) が指摘する、社会の流動性の高まりによる人間関係の自由化と、価値観の多元化の進行に添った対応であると考えられる。社会的な枠組みが弱まり、人間関係に流動性が生まれた今日において、多様な価値観に合わせて対人関係をこなせる流動性を身に着けているのである。

逆に言えば、最初に述べた、苦痛を感じている二人にはそういった流動性がないために、「関係的な生きづらさ」を抱えていることになる。当然、流動性を身につければ個々において問題は解決できるかもしれない。しかし、それは関係における問題の原因を一方に還元しているだけで、根本的な解決には至らない。

4.5 オタクでない人との人間関係に苦痛を感じる二人とそれ以外の七人との違いから浮かび上がる「関係的な生きづらさ」の危険性

本研究では、最初の2人ほど明確に「関係的な生きづらさ」をオタクとして抱えている対象者はいなかったわけだが、残りの対象者も共通してオタクを少なくとも多数派ではないと思っている。最初の二人にとっては、自分達が世間一般の多数派とは違う、オタクであることで「関係的な生きづらさ」を抱えているが、その他の対象者でそこまで追い詰めるほどオタクでない人との人間関係に困難を覚える者はいない。

このことは、同じオタクという、ある程度同じ価値観を有している人達の中でも、人によっては「関係的な生きづらさ」を抱える可能性があることを表している。つまり、オタクだけでなく、ある程度同じような価値観、同じ境遇に置かれている人達の中にも、人によっては「関係的な生きづらさ」を抱える可能性があることを示唆していると考えられる。

貴戸（2011）や雨宮・萱野（2008）は、この「関係的な生きづらさ」について、まずは不登校やひきこもり、ニート、ワーキングプアなどについて言論を展開しており、社会問題として、早急に取り組まねばならない課題であるとしている。

しかしながら、「関係的な生きづらさ」は何も彼らだけのものではなく、この二人のように誰しもが抱える可能性がある苦難であると考えられる。

本研究ではオタクという切り口を持ってその状況を明らかにしたが、かつて、オタクは中島（1991）がコミュニケーション不全症候群の典型としたように、人間関係において適応不能であるという言説が一般に流布されてしまった過去がある。そういった時期から20年以上経過した現在では、オタクという言葉が表す内容も変遷し、オタク自体の人口も増え、多数派ではないにせよ、20年以上前と比較すれば、少数派とは言えない状況になってきている。学術的調査ではないが、男性向けコンテンツ雑誌「Febri」2013年11月発行19号において、10代のオタクの実態を探るアンケートとインタビューによる調査が行われたが、そこでは、彼らにとってアニメやアニメソングはもはや普通の趣味であり、オタクであることに抵抗などないことが示されている。しかし、一方で、2014年2月3日に札幌市で小学校3年生の女儿が誘拐・監禁されていた事件では、容疑者は、「大人の男性が少女マンガを4冊も持っているのはおかしい」という理由で警察に通報されており、各報道機関もそれをそのまま報道したマンガ・アニメ好きだけがオタクではないとはいえ、このことは、いまだオタクがある程度奇異の目に晒されている現状を突きつけている。

故に20年前と比較すればオタクは人間関係においても適応不能ではなく、社会に受容されてきていると考えられるとはいえ、まだまだ十分とは言えない。それを反映するように、本研究のインタビュー対象者達も、「関係的な生きづらさ」を抱える者とそうでない者と分かれた。このことは、オタクを受容する社会がどのように変わったのか、あるいはそれをオタクが変えたのか、あるいはオタクが変わったのか、別の変化があるのかは分からないが、「関係的な生きづらさ」の問題を紐解く上で、オタクとオタクをとりまく社会の変化は参照に値するとの変化は参照に値するとの変化は参照に値すると本研究は提起する。

5 今後の課題

本研究はオタクと自称する対象者達のインタビューを分析し、「関係的な生きづらさ」の問題を捉えたわけだが、当然、九人のインタビューでは一般的な状況を明らかにすることは難しく、実態としてのオタクが加速度的に変遷していることを踏まえれば、そもそも何にオタク的である

のかといったことまで考慮に入れた研究が必要であるのは言うまでもない。

また、本研究では主旨ではないため詳細を述べなかったが、オタクについては「オタク文化のジェンダー的非対称性」がある。本研究のインタビューでは男女比に偏りがあるため、その非対称性について言及することはできなかった。

今後、男女比にも考慮し、インタビューだけでなく、アンケートなどを使った統計的な調査を行うことにより、オタクの人間関係を通して「関係的な生きづらさ」をより多角的に捉える研究を重ねていく必要があると考える。さらには、オタクではない人達、つまり対象者達が述べた多数派である「普通の人」達にも調査をし、比較検討することで「関係的な生きづらさ」をより多角的に捉えたいと考える。

註

- 1) 「コミュニケーション不全症候群」における「ダイエット症候群」については細辻恵子（1996）『「コミュニケーション不全症候群」から「感じやすさ」の問題へ』（『ソシオロジ』41巻1号、pp 87-82）で述べられているように「可愛がられたい」欲求が強く、土井が指摘した「自己承認欲求」の典型であるといえ、また適応過剰という点で考えれば、貴戸が指摘するように「関係的な生きづらさ」を抱えている人々は「社会性」が過剰であるので、ダイエット症候群の人々の方がオタクよりも親和性が高いと言えるだろう。しかし、結局のところ現在もダイエット症候群のためのダイエットにまつわる情報は溢れかえり、細辻（1996）が提起するところの傷つきやすさ自体に価値を実感できる世界は見出されておらず、コミュニケーション不全に対して改善されてきたとは考えにくい。ため、「関係的な生きづらさ」を捉えるには参照したとしても参考にはならないと考えたため、本稿ではオタクについてのみ論じた。

参考文献

- 厚生労働省（2013）『平成二五年度 国民生活基礎調査』
- 厚生労働省（2012）『平成二四年度 労働者健康状況調査』
- 土井隆義（2013）「フラット化する社会の陥穽——カリスマ待望論をめぐって——」『社会学ジャーナル』第38巻、pp 27-39
- 雨宮処凛・萱野稔人（2008）『「生きづらさ」について——貧困、アイデンティティ、ナショナリズム——』光文社新書
- 貴戸理恵（2011）『「コミュニケーション能力がない」と悩む前に——生きづらさを考える——』岩波ブックレット
- 中島梓（1991, 1995）『コミュニケーション不全症候群』ちくま文庫
- 株式会社 矢野経済研究所（2012）『クール・ジャパンマーケット／オタク市場の徹底研究 2012』
- 大塚英志（2004）『「おたく」の精神史——一九八〇年代論』講談社現代新書
- 相田美穂（2005）「おたくをめぐる言説の構成：1983年～20005年サブカルチャー史」『広島修大論集人文編』第46巻1号、pp 17-58
- 田川隆博（2009）「オタク分析の方向性」『名古屋文理大学紀要』9巻、pp 73-80
- 圓田浩二（1998）「オタク的コミュニケーション——「普通っぽい」アイドルと三つの距離——」『ソシオ

ロジ』第43巻2号、pp 67-79

相田美穂（2004）「現代日本におけるコミュニケーションの変容：おたくという社会現象を通して」『広島
修大論集人文編』第45巻1号、pp 87-127

玉川博章・名藤多香子・小林義寛・岡井崇之・東園子・辻泉（2007）『それぞれのファン研究』風塵社
折原由梨（2009）「おたくの消費行動の先進性について」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第8
巻、pp 19-46

谷津裕子（2010, 2013）『Start Up 質的看護研究』医学書院

飯田一史（2013）「あたらしいオタクの肖像」『Febri』一迅社